



武侠小説の流れ：
映像と文学から(<特集>中国文化の深層,中江彬教授
退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 範子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004497

武俠小説の流れ —映像と文学から—

山 本 範 子

一、武俠小説の源流

武俠小説とは一般に武術や肉体的な強さを示す「武」と、義侠心や精神的な強さを示す「侠」を兼ね備えた登場人物たちが主人公となる小説のことを指す。特殊な用語や武術、派閥など¹と共に、戦いや愛情などが描かれる物語である。では、いつ頃から武俠小説というジャンルが生まれたのであろうか。

清末から民国にかけて成立したとされるが、清代以前には「武俠」という言葉は今のところ発見されていない。² 中心となったのは一九二〇年から三〇年代に流行した旧武俠派小説である。なかでも映像化されて有名な作品としては『蜀山剣侠伝』（還珠楼主）³ であり、これは香港で二度映画化されている。『蜀山奇伝 天空の剣』⁴、『蜀山伝』⁵ がそれである。二作目は同じ監督によるリメイク作品であるが、ワイヤーワーク中心の一作目と比べて二作目はデジタル処理が多用化され、内容的には原作により近づいた形となっている。ここでは人間だけではなく、仙人や妖怪が登場し、かなりファンタジックな物語となっている。

しかし実は「武俠」という言葉が生まれるよりも前から、「侠」という言葉は用いられていた。⁶ また武俠小説のエッセンスを秘めた物語もたくさん存在していた。その源流ともいべき作品とはどのようなものだったのだろうか。

一般に、小説に近いものとして、最初に挙げられるのは司馬遷による『史記』である。『史記』自体が物語的ではあるのだが、中でも「刺客列伝」と「遊侠列伝」は特に武俠小説的な味わいが濃いいえよう。

予譲というのは、晋の人である。もともとは范氏と中行氏に仕えていたが、名をあげ認められることはなかった。かれらのもとを去って智伯に仕えたところ、智伯はかれをはなはだ尊重した。

その後、智伯は趙襄子を攻めたが、趙襄子は韓・魏二氏と共謀して智伯を攻め滅

ばし、そのあとで、智伯の領地を三つに分割したが、趙襄子はなかでももっとも智伯を恨んでいたので、智伯の頭骨に漆を塗って飲器にしたのであった。

予譲は山の中へ逃亡したが、「ああ、『士は己を知る者の為に死し、女は己を説ぶ者の為に容る（化粧する）』とか。智伯さまはおれの理解者だった。おれはきっと仇を討って死ぬぞ。それで智伯さまにご恩返しできるとなれば、おれの魂も恥をかくことはあるまい」と述懐して、そこで姓も名もかえて刑余の人間になりすまし、〔刑余の労役者をよそおって〕宮殿にはいりこんで、便所の壁塗りをしながら、ふところに匕首をのんで、趙襄子を刺し殺す機会をねらっていた。趙襄子は便所へたつたところ、なにか胸さわぎがし、そこで、壁塗りの刑余者を捕らえて尋問してみると、予譲であった。ふところに武器をしのばせ、申すには、「智伯さまのために仇を討つつもりだった」。側づきの家来たちはかれを殺そうとしたが、趙襄子は言った、「そのものは義士じゃ、わしの方が遠慮して避けることとしよう。それに智伯が死んだあと跡継ぎもいないのに、その家来が仇を討とうとする。この者は世にもすぐれた人物じゃ」。結局予譲を放免した。…略…（『史記』 卷八十六）⁷

今、游侠はその行いは正義に則ってはいないが、その言葉には必ず信があり、その行いは必ず果たし、応諾すれば必ず誠実であり、自分の命を惜しまずに士の苦難に赴き、自分の生死存亡にはこだわらない。それでいて自分の能力を誇ることはせず、自分の徳を誇ることを羞じた。思うに、彼らにもまた、多とするに足るものがある。（『史記』 卷一百二十四）⁸

これらから見て取れるのは、刺客、遊侠の徒、といった無頼漢、或いは反社会的ともいえる人物に、司馬遷が一定の評価を与えているという点である。『史記』において、それまでは相手にされなかった身分、立場の者にも光を当てて評価したことにより、従来の視点の変化が促されたのは間違いないといえよう。

唐代に入り、「侠」という存在はますますもてはやされるようになる。いわゆる唐代伝奇小説である。ここでは、「豪侠」⁹、「侠義」¹⁰などと呼ばれておりまだ「武侠」という言葉は誕生していない。たとえば、このような話がある。

唐の貞観の頃、恒州に彭闥と高瓚がいた。二人は（どちらが）豪であるかを争っていた。大酺の時に、その席上で二人は勝ちを競った。闥は豚を一匹活け捉りし、頭からてっぺんまでかみ、それを地面に置くと、豚は歩いた。瓚は猫のこどもを掴んでこれを尻尾から食らい、はらわたをすべて食べ尽くしてしまったが、子猫は鳴きやまなかった。闥はここにおいて心服し服従した。（「彭闥高瓚」朝野僉載）¹¹

ここでは我々の考える「おとこ 俠き 氣」というイメージとは異なり、「超人」「異能力者」も豪俠として考えられていることが分かる。もちろん「虬髯客」(『太平広記』巻第一百九十三)のような、いかにも「俠客」といった存在も記されており、当時の「俠」が「まれびと 稀人」に通じていたのを見て取ることができよう。

唐代伝奇で特徴的なのは、俠という存在が男性だけではない点である。女性の俠、つまり「女俠」の存在も見逃すことはできない。

聶隱娘は唐の貞元中、魏博大將聶鋒の娘である。…略(聶隱娘は十歳にして不思議な尼僧にさらわれ、山奥で修行する)… 一年後、猿をしとめたが、百に一つの失敗もなかった。後に虎をしとめたが、すべてその首を持ち帰った。三年後には空を飛び、鷹や隼をしとめ、外れることはなかった。(来た当初にもらった二尺ばかりの刀の) 刃はすり減って五寸になっていた。…略… (『聶隱娘』傳記)¹²

聶隱娘の場合は、特殊な殺人術を教え込まれて刺客に変貌する。しかし冷酷な殺人者であっても、「俠」に分類されている。その超人的な能力ゆえであろう。ほかにも「紅綫」(『太平広記』巻第一百九十五)のように、義を重んじる女俠も存在するし、「車中女子」(『太平広記』巻第一百九十三)のように身軽で飛ぶ鳥のような、謎の女性(盗賊か?)も存在している。

これらの起源となるものは、当時巷間ではやっていた雑技ではないかと言われている。¹³

「玄宗の時代には、教坊の女芸人王大娘の戴竿の演技が最も有名であった。…略… 女性が頂竿を演じるということは、唐代の革新的なできごとであった。女性が人に与える印象は、柔弱さであるが、その女性を大力士として育て上げたことは、一大壮挙といってよい。…略… 走繩は慣例として、ふつう女芸人が専門に行う演技で唐代でもそれは変わらない。…略… 唐代には、劍器は「健舞」に包括され、女子が軍装して演じた。」(『中国芸能史』第四章)¹⁴

戴竿は竿の上での演技、走繩は高い位置に張られた縄の上での演技、劍器は劍を用いた演技である。このように、女性も活躍する軽業や劍技、或いは幻術などが、人々に大きな影響を与え、想像力をかきたてる手助けとなったのではないだろうか。唐代伝奇では、女俠に限らず女性を描く作品が多い。特に恋愛分野での『李娃伝』『鶯鶯伝』など、出色した女性の形象は印象深い。様々な女性が文学、それも小説というジャンルで描かれるようになった時期に、戦う女性、義侠心に富む女性が創作されたことは、注目に値するだろう。

例えば『俠女』¹⁵ という映画は、原作自体は清代の『聊齋志異』の「俠女」ではある

が、唐代の女侠にも通ずる、戦う、強くたくましい、美しい女性像を見てとることができる。映像的にも女性のアクションは華やかであり、中華圏のドラマや映画では戦う女性キャラクターを非常に多く見て取ることができる。現在にまでつづく、ある種固定化した女性の形象なのかもしれない。

唐代伝奇にはほかにも、特殊な身分が活躍する話もある。

時に家中に昆崙奴の磨勒というものがいた。…略（彼は若主人の恋の悩み相談を受け、恋の橋渡しをし、更に二人の逃亡を手助けする）…磨勒はまず女性の持ち物（化粧箱など）を（厳重な警備と高い塀をものともせず）運んだ。（大荷物を運び出した後で、女性を、そして若主人を担いで、雨あられと降り注ぐ矢をかいぐって二人を連れ去る）…略…（「昆崙奴」傳記）¹⁶

ここでは黒人奴隷が主人のために義侠心を表して超人的な能力を発揮する話が登場する。ほかにも「僧侠」（『太平広記』巻第一百九十四）「蘭陵老人」「京西店老人」（『太平広記』巻第一百九十五）のような超人的な能力を持つ僧侶や老人も存在する。これらのように、侠という存在は普段は市井もしくは山奥に隠れ、塵世に紛れてひっそりと暮らしているのが常である。それがいざという時に神業的な能力を見せつけるのである。つまり、「侠」は「異人」¹⁷なのである。アウトロー、もしくはアウトサイダーとも言えよう。彼らは決して本当の意味での、善良な一市民になりえないのかもしれない。

さて、宋代に入ると侠の存在は、小説のみならず、講談へと発展していく。講談とは市民を対象とした語り物文芸である。一回もあれば、連載もある。当時は相当華やかだったようだ。北宋末の作品『東京夢華録』にもその様子は描かれており、「講史」「小説」「説三分」などが記されている。¹⁸

唐代伝奇の影響を残しつつ、宋代ではより広く深く一般民衆に「侠」が浸透していったと考えられる。また講談は語り物であるから、当然、聴衆の好みを反映する。語られ続けるうちに、より人々の理想の、望ましい形に変貌していった可能性は否定できないであろう。

明代になると、唐代伝奇や宋代の講談の影響を受けて、様々な小説が生み出された。長編小説では『水滸伝』などが、最も有名な「侠」を描いた作品といえよう。百八人の英雄とはすなわち百八人のアウトローであり、侠気にあふれた人物たちなのである。おごり高ぶる貪欲な官僚を打ちのめし、貧しい人々の側ごろつきに立つ。ただの破落戸ではな

い何かが、彼らには存在しているのである。

なかでも林冲の逸話などはよく映像化されている。たとえば映画『水滸傳之英雄本色』¹⁹では、林冲と妻の愛情を中心に、二人が引き裂かれ、林冲が梁山泊へ行くことを決意するまでを描いている。またその中でも、夫妻に恩義を感じた男が命懸けで二人のために奔走する姿は、まさに「義」と「俠」を感じさせられる場面である。

『三国志平話』も、後に整頓されて編集された『三国志演義』と比べると、よりダイナミックに「俠」が描かれている。特に顕著なのが張飛である。彼の荒唐無稽な言動は、滑稽であると同時にアウトローとしての面目躍如、といった感さえある。²⁰

とはいえ『三国志平話』にせよ『三国志演義』にせよ、どちらにしても義に殉じる俠気に満ちた人物たちが入れ替わり立ち替わり登場するのにかわりはない。

たとえば、テレビドラマ『三国志演義』²¹では、桃園の誓いのシーンなどが「義」というものをよく表しており、義兄弟という存在に対する理想化を見てとることができる。

『楊家将演義』も明代に特に流行した家族戦記もの²²の一つで、楊一族が辺境で祖国を守り続ける物語である。ここでは大活躍するのは男性というよりはむしろ女性、女将たちである。唐代では孤高の女侠たち²³であったヒロインが、明代では家族という枠を得てその中で戦う女将へと変貌していくのである。

テレビドラマの『楊家将』²⁴では、前世譚が描かれている。そこでは弟に惨殺された皇帝の魂が、天界へ昇り玉帝に訴えるところからはじまる。その非道な行いに怒った玉帝は女神を一人敵国に派遣し、弟が篡奪した宋を攻めるように命じる。しかし宋の命数は三百年。下手に女神が手出しをすれば宋を潰して天命を覆してしまうかもしれない。それを防ぐべく、玉帝は宋にも文曲星など何名かを派遣する。つまり、楊一族の者や敵国の腕の立つ武人たちはすべて天界人の下凡・転生した姿である、という設定である。このような生まれ変わり説はほかにも多く用いられ、特に英雄豪傑、偉人などにはつきものの伝説である²⁵。『楊家将演義』における皇帝、宋の仁宗皇帝自身も赤脚大仙の転生だという言い伝え²⁶があるほどである。

明代ではこういった歴史や戦記といったジャンル以外にも武俠小説に影響を与えた分野が存在している。公案小説と呼ばれる、裁判小説である。特に有名な人物として包公²⁷を挙げることができよう。包公は実在した清廉潔白、公平無私な裁判官で、次第に伝説化されて特殊な能力を持った人物として虚構化されていった。²⁸

…略… 包公が言った。「この世には人に損害を与える官がいるが、あの世には人に損害を与える理はない。福祿や因縁は、天が既に定めているもので、怨恨もその

ようである」…略… 包公が言った。「わしが最も憎むのは、役所が損なって不正行為を行うことだ。秀才の言うことももっともである」そこで鬼吏に命じて婚姻を司る役目の者を連れてこさせた。…略…（「久鰥」巻之四）²⁹

明代において、包公は夢で犯人を見いだしたり、被害者の幽霊から犯人のヒントを得たり、はたまた昼は人間界夜は冥界の裁判官を行うという超人的な人物として物語の中心となっていた。こういった公案小説は数多くの種類を生み出し³⁰、謎解きだけではない、虐げられた弱者や民衆を救うという裁判官像が好まれた。むろん、このような権力にこびない、「強きをくじき弱きを助ける」民衆の味方、といった理想像は、「俠」の一つの典型であるともいえよう。ただし、別の観点から見れば、それまで在野で反体制側だった「俠」が、捕り手方に回ってしまう、という矛盾が生じたのも事実である。

清代に入ると、それまでの様々なジャンルを吸収して、俠義小説という一つのジャンルに集約されていくようになる。そのため、恋愛や妖怪、戦記などもバラバラに存在するのではなく一つに包括され、同じ物語の中にいくつもの要素が描かれるようになっていく。

たとえば公案小説の荒唐無稽な部分は減少し、人間中心の物語へと移行する。包公の物語も、彼を中心に配下に義侠心あふれる男たちが集うタイプへと変化していく。明代の物語では五匹の鼠の妖怪だった存在³¹が、『三俠五義』では「五鼠」というあだ名を持つ盗賊（人間）に変わっている。妖怪変化のたぐいから、より現実味を帯びた展開になっているといえよう。そのため妖怪退治的な内容は減り、腕の立つ男たちの戦い、キャラクターの描写などが際だってくる。まさに「武俠小説」の前身、というにふさわしい物語といえよう。だからこそ、包公物語は明代までは公案小説に分類されていたにもかかわらず、この『三俠五義』では俠義小説に分類されたのであろう。

…略… 包公は満面に笑みをたたえて言った。「五義士よそのようにする必要はない、わしが自ら保証しよう」振り返って展爺（展照）に命じて刑具を持って行かせ、衣服を交換させると、座を見た。白玉堂がすすんでそこに座った。包公は白玉堂をじっくりと眺めて、思わず喜びで胸がいっぱいになった。白玉堂は包公を見ると、無意識に厳然として畏敬の念を覚えた。…略…（第五十八回）³²

テレビドラマ『包青天』³³は『七俠五義』を元になっているが、中心として活躍するのは包公ではなく配下たちである。包公は最後に登場する水戸黄門のような役割になっており、俠気あふれる人物たちが所狭しと戦う有様をみることができる。もちろん謎

解きも裁判も重要なのだが、やはり視点は人物描写、それも「侠」たちであると言えるかもしれない。

しかし、包公の配下に取り込まれたことによって、それまでの反体制、反朝廷的なアウトローであった盗賊・義賊たちが、政府の飼い犬になってしまい、本来持つべき特性を失ってしまったことは否定できない。³⁴

そのほか、恋愛小説と俠義小説が混じったものとしては、『児女英雄伝』が有名である。『水滸伝』や『楊家将演義』などにも、戦う女性はたくさん登場していたが、この『児女英雄伝』の場合は、女主人公が一人であり、英雄というスタイルに児女が加わるスタイルになったものである。英雄としての俠義小説である前半では、腕の立つヒロイン十三妹がヒーローを救いつつ敵と戦い、いわゆる「女侠」として活躍するのだが、後半でヒーローと結婚したとたん伝統的貞淑な妻に早変わりしてしまう。³⁵ これも結婚して家族制度に取り込まれたがゆえに、「女侠」が持つ孤高のイメージを消失したパターンだといえるかもしれない。

おおむね、清代ではこのように俠義小説が発達し流行したが、その中身はもはや「侠」だけではなく恋愛も戦記もごちゃまぜに含んだ内容となっていた。これが下地となり、武侠小说が誕生してくるのである。

二、武侠小说の誕生 …旧派武侠小说

晩清末から政治的・社会的な風潮により武侠精神が再び重視されるようになり、烈士が評価されるようになっていく。1920年代、上海で『武侠世界』という月刊誌が刊行されたが、その時期は西洋からシャーロック・ホームズや恋愛小説などが流入し、新文芸運動が起こっていた時期でもあった。

旧派武侠小说はこういった中で誕生した。西洋文学の影響下、それまでの講談調の文体を脱し、一人称など新しい手法が盛んに行われた。そのような中で、平江不肖生³⁶が登場する。彼は実在した霍元甲³⁷をモデルにした小説³⁸など、祖国を侵略する勢力に対する強烈なナショナリズムに満ちた、新しい「侠」を描いた。彼の作品である『火烧紅蓮寺』は何度も映像化され、高い評価を受けている。³⁹ なお弟子が霍元甲の死の謎をとく、という筋で、李小龍主演の映画『精武門』⁴⁰が制作され、国内のみならず海外でも大評判になった。平江不肖生は「侠」に「民族意識」を結びつけた作家であると言える。

さらに、彼は現在では当たり前のように用いられている武侠小说の重要な概念・思

想を生み出している。たとえば「内家」や「外家」は今の「内功」「外功」にあたる。これはそれまでの武侠小说にはなかった、新しい概念である。こういったことから、彼は武侠小说の描写を理論化し、精緻化していったのである。なお実は彼自身も武術を身につけており、そのため空想上だけではなく現実的な武術観が影響していたものと思われる。

さて、映画では80年代にワイヤーワークや特撮技術で、非常に有名になった『蜀山奇伝 天空の剣』という作品があるが、これは還珠楼主⁴¹の『蜀山剣俠伝』が原作である。還珠楼主は幼い頃から神童として有名であり、勉学のみならず武術や気功にも優れていたらしい。その彼の記した作品群は、神怪武侠小说とでも言おうか、妖怪や仙人、神業的な剣技を持つ剣仙などが登場する、神話的でファンタジー的な小説が多い。彼は旧派武侠小说の最高峰とも目されており、さまざまな種類の「情」を重視しているのが特徴の一つである。

映画は登場人物こそ原作を利用しているものの、本来の筋からは大きく逸脱しており、ほとんどオリジナルの域に達している。そのためか、同じ監督が新たに2001年に『蜀山』を撮り直したが、こちらは物語としては原作に近い形となっており、SFXとコンピュータ技術を駆使した作品となっている。

その他にも、作家としては白羽⁴²、鄭証因⁴³、王度廬⁴⁴、朱貞木⁴⁵などが有名である。

三、武侠小说の隆盛 …三大武侠小说家

二十世紀後半より香港や台湾を中心に生じたのが新派武侠小说である。現在日本でも翻訳が進んでおり、ドラマや映画の輸入も少なくない。特に三大武侠小说家として著名なのが、金庸⁴⁶、梁羽生⁴⁷、古龍⁴⁸の三名である。

金庸は存命中の作家で、「金学」⁴⁹と呼ばれる学問までできており、武侠小说としては唯一学問的にも認められる、国民的作家である。長短あわせて十五部三十六冊の小説を執筆し、1972年の断筆宣言以降は新作はなく、現在は過去に発表した作品の加筆修正を繰り返している。金庸の作品は何度も、数多くのテレビドラマや映画になっており、それが制作されるたびに国中の議論を呼び、役者がイメージに合う合わないの大論争になっていることでも有名である。⁵⁰時には原作を大胆に改編した『東邪西毒』⁵¹や『大英雄/射鵬英雄傳之東成西就』⁵²といった映画もあり、金庸作品が既にある種の基本となっている様子が伺える。ゲーム化や漫画化も盛んであり、メディア化としても視覚的に優れているのだと言えよう。

金庸の作品は史実に基づき、非常に緻密な人物描写、こまやかな心理表現などが特徴的であり、それまで低く見られがちだった武侠小说を、知識人階級の楽しみにまで昇華した作家であると言えるかもしれない。

日本でも『歴史と文学の境界 <金庸>の武侠小说をめぐって』⁵³ や『金庸は語る中国武侠小说の魅力』⁵⁴ といった専門の書物も発行されており、今やその人気は中華圏のみならず日本においても健在である。

梁羽生は新派武侠小说の祖ともいえるべき存在である。彼の筆名自体、旧派武侠小说の作家「白羽」を尊敬する余り、「羽生」とつけたほどで、彼がどれほど武侠小说を好んでいたかがよく分かる。梁羽生の作品の特徴は、歴史大河ドラマといった風情があり、全三十六作は隋から清の時代まで、史実を盛り込みながら、波瀾万丈な物語を展開している。特に女俠を中心とした恋愛は華やかで且つ美しく、時に悲劇で、胸を打つ感動的な場面が印象深い。テレビドラマ『雲海玉弓縁』⁵⁵ は梁羽生の作品が原作だが、性格も立場も育ちも違う二人の女俠が、一人の天真爛漫な男性を愛し、男性もまた彼女たちの間で揺れ動く。善良で心優しい女性か、それとも激しい愛をぶつけてくる悪女か。そこには単純な善悪二言論では語れない、人間の深い感情が描かれている。また映画『白髪魔女伝』⁵⁶ もシリーズとして二作が発表されたが、やはり梁羽生の作品らしく、敵対する立場の男女が互いに惹かれあいながらも、武林の抗争や周囲の思惑に巻き込まれていく悲恋が描かれている。映画は原作をアレンジしていたものの、配役が当時人気の高かった俳優陣⁵⁷ であったためか、或いは映像的な美を意識していたためか、日本でも高い評価をうけていたように記憶している。

古龍は上記の二人とは全く異なった雰囲気のある作品を書いている。豪放磊落、^{おとこ}漢臭く、血と汗、裏切りと友情などが似合う作風である。特に女性の存在がぞんざいになる傾向があり、漢たちの世界に女の入り込む隙間はない。主人公と恋愛関係に陥っても、最終的には身を引いたり、実はとことん悪女であったりと、理想化されない女性描写のことが多い。古龍自身も相当な酒飲みでヤクザな生活をしていたことで有名で、小遣い稼ぎに自分の筆名を気軽に貸し出していたほどである。そのため、現存している古龍作品のうち、どれが本当に彼が書いた作品か、という研究すらあるほどである。その作風も物語性というよりもキャラクター性にあり、楚留香⁵⁸、小李飛刀⁵⁹、陸小鳳⁶⁰ など著名なヒーローを排出している。

彼の作品もまた繰り返し映像化されており、『辺城浪子』⁶¹ は影のある主人公を、実際に武術経験のある俳優が好演しているし、割と最近のテレビドラマ『小李飛刀』⁶² は人気があったのか第二部も制作された。実際に映像化された作品を見てみると、意外に

原作に忠実なものが多いことに気づかされる。実は古龍の文章自体が脚本のように、ぶつ切りで短いものが多く、視覚的、聴覚的な描写にも優れており、映像化向きの小説と言えよう。たとえばテレビドラマ『陸小鳳之決戦前後』⁶³での西門吹雪と葉孤城の最終決闘シーンは、この作品の最高の見せ場である。陰影を用い、無駄な台詞をすべて省き、ただ息づかいと戦う音だけが響き渡る。固唾を呑んで見守る人々、緊迫した空気、命懸けの男たちの一騎打ち……ここに武侠小説の一つの美学が凝縮されている。情を描くのは決して得意ではない作家で、物語にも深みはないと批判されがちだが、個性のある骨太の小説であると言えるかもしれない。

四、日本における武侠小説の翻訳・出版状況

現在、入手しやすいものを中心に挙げてみる。

なお、ビデオやDVDは大量に輸入・翻訳されており、タイトルを挙げることはしなかった。

【研究書】

『中国の英雄豪傑を読む 三国志演義から不器用小説まで』（鈴木陽一／大修館書店）

『中国武侠小説への道 漂泊のヒーロー』（岡崎由美／大修館書店）

『武侠小説の巨人 金庸の世界』（監修 岡崎由美／徳間書店）

『きわめつき武侠小説指南 金庸ワールドを読み解く』（監修 岡崎由美／徳間書店）

『岡崎由美が語る香港映画原作の世界 武侠小説』（岡崎由美・伊藤卓・浦川とめ／賓陽舎）

『金庸は語る 中国武侠小説の魅力』（鈴木陽一 編著／御茶ノ水書房）

『歴史と文学の境界 <金庸>の武侠小説をめぐる』（神奈川大学人文学研究所 編／頸草書房）

『キン・フー武侠電影作法』（キン・フー 山田宏一 宇田川幸洋／草思社）

『武侠映画の快楽』（岡崎由美・浦川留／三修社）

【翻 訳】

金庸 作品 徳間書店より全作品翻訳。また現在徳間文庫より文庫化して順次発売中。

古龍 作品 早稲田書房より復刊中。小学館などで出ていた作品は現在絶版。

梁羽生 作品：現在『七剣下天山』（徳間文庫）のみ。

【注】

- 1 例えば『神鵬剣俠』（金庸/岡崎由美・松田京子 訳/徳間文庫）の付属ページには、「武俠小説基本用語解説」があり、簡潔だが非常にわかりやすく説明されている。
- 2 武俠という言葉は実は日本人の造語ではないか、という説がある。（『漂泊のヒーロー』（岡崎由美/大修館書店）に詳しい）
- 3 一九三二年より天津の『天風報』に連載開始された小説。のち蜀山系列ともいうべき一大シリーズに発展した。
- 4 ツイ・ハーク 監督・一九八三年。
- 5 ツイ・ハーク 監督・二〇〇一年。
- 6 俠義小説の起源として、先秦兩漢にあるとする意見が通説になっている。特に『韓非子』「五蠹」篇において「儒は文を以て法を乱し、俠は武を以て禁を犯す」と述べているのが例として挙げられる。ここで言う俠とは俠客義士のことである、とされる。
- 7 『史記』卷八十六 刺客列傳第二十六（司馬遷/中華書局）
 なお「刺客列傳」の自序によれば「曹沫が匕首をとって、魯の国はその領土をとりもどした。斉もその約束にそむかず信義をみせた。予譲は忠義をまもり、二心をもちなかった。ゆえに刺客列傳第二十六を作る」とある。司馬遷が刺客に対して価値を見いだしているのが分かる。
 なおこの箇所本文引用訳は岩波文庫「史記列傳 二」（小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳）を用いた。
- 8 『史記』卷一百二十四 遊俠列傳第六十四（司馬遷/中華書局）
- 9 たとえば類書である『太平広記』では「豪俠」という項目をたてている。
- 10 『俠義公案小説史』（浙江古籍出版社）など、専門書では「俠義」と分類しており、「豪俠」と分類するのはそれほど多くはない。
- 11 『太平広記』卷第一百九十三（中華書局）

- 12 『太平広記』巻第一百九十四（中華書局）
- 13 『唐代豪侠小説と散樂百戯』（岡崎由美/『日本中国学会創立五十年記念論文集』）
- 14 『中国芸能史』第四章（傅起鳳・傅騰龍/岡田陽一 訳/三一書房）
- 15 胡金銓 監督・一九七〇年
- 16 『太平広記』巻第一百九十四（中華書局）
- 17 「異人」については諸論あるが、例えば『異人論序説』（赤坂憲雄/ちくま学芸文庫）では、異人を「漂泊者、来訪者、移住者、マージナル・マン、帰郷者、バルバロス」に分類している。また中国における異人については『異人と市—境界の中国古代史』（相田洋/研文出版）も参照した。
- 18 『東京夢華録』（孟元老/入矢義高・梅原郁 訳注/平凡社）によると、「講史」は歴史物を扱う連続講談、「小説」は世話物や実録物、「説三分」は三国志語りである。詳しくは『話本小説概論』（胡士瑩/中書局）参照のこと。
- 19 チャン・ウイガイ 監督・一九九三年
- 20 『三国志平話』と『三国志演義』との違いについては、『三国志演義』（井波律子/岩波書店）など、先行論文・著書で数多く指摘されている。
- 21 中国中央電視台 制作・一九九四年
- 22 岡崎由美氏によると「女将軍が活躍する舞台は、武将一族の数世代にわたる活躍を描いた家族型戦記物語である」（『漂泊のヒーロー』）であり、男性が滅亡し女性が活躍する「一族の崩壊と復活」を表していると述べている。また、元来は伝奇英雄戦記であった物語が、明末から清代にかけて女将集団を組み入れていく背景には、「荒唐無稽で通俗的な内容が、郷鎮の市場地の祭りの賑わいなどを通じて、より庶民的なレベルで民間に流布していった」とする。このようなタイプの作品は明代に数多く登場した。
- 23 家族のもとに戻っても、或いは結婚して家族の一員になっても、結局は立ち去っていくパターンがほとんどである。例えば「崔愼思」（『太平広記』巻第一百九十四）では、女侠が立ち去る際に我が子を殺している。おそらくは未練を残さぬようにするだろであろうが、凄絶でさえある。唐代での女侠はそういった意味では、孤高を保つ存在だといえるだろう。
- 24 TVB 製作・一九八五年
- 25 例えば『三国志平話』の冒頭では、秦末漢初の韓信らが高祖と呂后を訴え、司馬仲相がこれを裁き、天帝が韓信を曹操に、彭越を劉備に、英布（黥布）を孫

- 権、高祖は献帝、呂后は伏皇后として生まれ変わらせ、裁判官の司馬仲相は司馬仲達に生まれ変わらせ天下を治めさせることにしている。また他に『平妖伝』『水滸伝』なども動物や天の星の生まれ変わりである。
- 26 赤脚大仙が仁宗皇帝に転生したという説は多い。天帝が「誰か生まれ変わらないか」と問うたところ、赤脚大仙がにっこり笑ったため、彼に決まったという。この説話は『水滸伝』や『平妖伝』などにも見られ、巷間に広く伝わっていた話であると思われる。詳しくは、「四帝仁宗出世故事考——赤脚大仙転生の話——」（掘誠/『中国詩文論叢』一/一九八二）を参照のこと。
- 27 包拯（999－1062）。字は希仁。廬州合肥の人。清廉かつ剛直な性格で知られ、名裁判官として伝説化され、『包公案』など多くの物語になった。（『宋史』卷三百十六 列傳第七十五）
- 28 『包公伝説の形成と展開』（阿部泰記/汲古書院）参照のこと。
- 29 『包公案』卷之四（『中国公案小説大系』/黒竜江人民出版社）
- 30 例えば『中国公案小説大系』（黒竜江人民出版社）には、「施公案」「彭公案」「海公案」など、「包公案」を含む全十三作品が集められている。
- 31 明代成立と思われる神魔小説『五鼠鬧東京包公収妖傳』。詳しくは拙論『『五鼠鬧東京』成立考』（『颯風』第三十七号）を参照のこと。
- 32 『古本小説読本叢刊 三俠五義』第五十八回（石玉昆 述/中華書局）
- 33 『包青天』台湾・一九九三年。また最近でも『少年包青天』というテレビドラマ・シリーズが包公説話にはないオリジナルの物語で放映されたが、非常に人気を博し、第二部まで製作された。
- 34 『水滸伝』でも、後半で梁山泊の英雄が皇帝に仕えることになるが、その時点から物語は収束に向かう。『水滸伝』の場合は、一つの物語内での方向性の転換という意味で、時代によって変化していった包公説話よりも、むしろ後述する『儿女英雄伝』に通ずるものがあるのではないだろうか。
- 35 武田 泰淳の『十三妹』では、ヒロインは結婚後も女侠としての色合いを保ち続けている。結婚後に突然しとやかで貞淑な女性に変貌する『儿女英雄伝』の十三妹よりは、いつまでも変わらず超人でありつづける『十三妹』のヒロインのほうが物語としてはずっと興味深いように感じる。
- 36 本名は向凱然（一八九〇～一九五七）。
- 37 実在した武術家（一八六八～一九〇九）で、日本人武術家と戦った数日後に謎の死を遂げた。『近代俠義英雄伝』の主人公としてより有名になった。

- 38 『近代俠義英雄伝』。
- 39 原作は『江湖奇俠伝』で、映像化された『火焼紅蓮寺』（一九二八年に第一集、一九三一年には第十七。十八集がつづけて発表された）はその一部。
- 40 ロー・ウェイ監督・一九七二年。
- 41 本名は李寿民（一九〇二年～一九六二年）。
- 42 一八九九年～一九六六年。
- 43 一九〇〇年～一九六〇年。
- 44 一九〇九年～一九七七年。映画『グリーン・デスティニー』の原作である『臥虎藏龍』の作者。
- 45 一九〇五年？～不明。
- 46 本名査良鏞（一九二四年～）。
- 47 本名陳文統（一九二二年～）。
- 48 本名熊耀華（一九三七？年～一九八五年）。
- 49 学会も開催され、本格的な学問の一分野とみなされている。
- 50 特に連続テレビドラマになった場合、毎回放映前から新聞やインターネット上で、一般市民のみならず専門家までもが参加して、イメージに合うか否か大論争になっている。俳優にとっては、大きなプレッシャーであろう。
- 51 ウォン・カーウァイ監督・一九九四年。
- 52 ウォン・カーウァイ監督・一九九三年。
- 53 『歴史と文学の境界 〈金庸〉の武俠小説をめぐって』（神奈川大学人文学研究所 編／頸草書房）
- 54 『金庸は語る 中国武俠小説の魅力』（鈴木陽一 編著／御茶ノ水書房）
- 55 TVB 製作・二〇〇二年年。
- 56 ロニー・ユー監督・一九九二年。
- 57 翌年に続篇も出ている。当時人気絶頂だった張国榮、林青霞が主演し、妖艶な魅力を振りまいている。
- 58 盗みの現場に残り香を残す美形俠盗で、常に周囲に美女を侍らせている洒脱な人物。
- 59 口ひげと眉毛を合わせて「四本眉毛」とあだ名される腕の立つ遊び人。
- 60 外すことのない飛刀術で名を馳せる、悲恋を秘めた流浪の俠客。
- 61 フランキー・チャン監督・一九九三年。
- 62 一九九九年。

63 二〇〇一年。

【主要参考文献】

『侠義公案小説史』（曹亦冰/浙江古籍出版社）

『侠義公案小説簡史』（曹亦冰/山西人民出版社）

『20世紀中国通俗文学史』（範伯群・湯哲声・孔慶東/高等教育出版社）

『千古文人俠客夢』（陳平原/新世界出版社）

『台湾武侠小说發展史』（葉洪生・林保淳/遠流出版）

『金庸武侠小说完全手冊』（張秀奇/山西教育出版社）

『傲世鬼才—古龍—古龍與武侠小说國際學術研討會論文集』（林保淳 主編/臺灣學生書局）

「遊俠に就て」（宮崎市定/『宮崎市定全集5』/岩波書店）

「中唐豪俠小説論序説」（岡本不二明/『興膳教授退官記念中国文学論集』/汲古書院）

ほか、各武侠小说など。